

Title	レイナー・バナムの建築批評について : 環境としての建築とテクノロジーへの問いかけ
Author(s)	高山, 由佳
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52765
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

レイナー・バナムの建築批評について

— 環境としての建築とテクノロジーへの問いかけ —

高山由佳／大阪大学大学院文学研究科 博士前期課程2年

レイナー・バナム (Reyner Banham, 1922-1988) は建築史家、デザイン史家として、1950年代初めから執筆活動を始めた。その研究対象は極めて多岐に渡る。エンジニアとしての経験から工学技術分野の知識を活かし、どの時期においても独自の建築批評、デザイン、文化批評を展開した。バナムの建築批評において特筆すべきは、建築に対するその急進的な態度であり、おもに近代建築と同時代の建築を対象にし、建築というもののあり方についてラディカルな議論が展開されている点である。

その主著『第一機械時代の理論とデザイン』において、バナムは第一機械時代の建築の理論とデザインが、未来派とアカデミー派との間において展開されたことを示した。同時に第二機械時代に相応しい建築の在り方について問題提起を行った。その緒論においてバナムは、「第一機械時代」及び「第二機械時代」の特徴を説明した。そこでは科学と技術の変革がいかに人間の生活に多大なる影響を与え、それにより建築の在り方、見方がどのように変化したかが重要な論点となっている。機械時代とは二つの点によって特徴付けられている。ひとつは、人間が膨大な動力を処理できるようになった点。もうひとつは、技術革命が小型化された機械を中心に起こり、生活における視覚的、聴覚的な領域での革命に貢献した点である。バナムは近代建築と機能主義とを定義直し、建築と他の分野（とりわけ自動車に関する技術など）の急速な発展との関わりや、新しい技術と「感覚的に結びつく造形芸術」に関する問題に取り組んだ。

バナムは建築とテクノロジー、あるいはテクノロジー文化 (technological culture) との関係について多くを論じている。それは極めてラディカルな方向で、科学技術、すなわち高度な機能をもった機械装置や環境調節設備が建築にとって代わるような状況を扱うものであった。この典型的な例が 'A Home is not a House' という論考であり、当時 (1960年代後半) の、アーキグラムをはじめとするバナム周辺の建築家たちが行っていた試みと共鳴するものでもあった。

『アート・イン・アメリカ』誌に掲載されたこの論考において、彼は「標準型住居パッケージ (Standard-of-Living Package)」というアイデアを提出した。それは、ひとまとまりの機械設備が人間の生活に必要なサービスを提供するというものであった。この一揃いの機械設備によって従来の堅固なシェルなしで、身体的な危険の回避や快適性の確保、プライバシーの保護が可能になるという。中心に機械装置があり、居住空間は条件に応じて限定され、また無限に開放される。ここにはバナムのアメリカの建築に対するはっきりとした態度と評価が窺われる。アメリカは技術的、文化的な土壌として、機械化された環境技術と建築の関係が調和的に構築される条件がそろっていた。ヨーロッパの近代建築の主流において置き忘れられ、適切に取り扱われなかった機械による諸々の環境技術の問題が、アメリカの建築に関するバナムの調査・研究によって見出された。

バナムのラディカルな態度は、彼の未来派に対する賛美やアーキグラムに対する評価、

1970年代のハイテク建築に対する見解にも現れている。それらは、バナムのエンジニアとしての経験やブリティッシュ・ポップの運動への関わりなどを主な素地としたものと考えられるが、同時に、どの時期においても彼の建築観に通底する、ある一つの確固とした信念に基づいているように思われる。

バナムは近代建築に対しても独自の視座をもって論じていた。未来派やドイツ表現主義の建築への評価のみならず、近代建築の一部が成した変化と革新の意義をバナムは、やはりテクノロジーとの関わりにおいて考えた。近代建築以降においては、機能、形態、構造の問題も、新しい技術、新しい材料の発明に関する視点なしには語り得ない。最も直接に影響を与えたのはおそらく機械化された環境技術であろう。しかし、それ以外の諸々の技術、例えば自動車や航空機のような輸送技術や家庭電化製品の技術、ロボット工学、宇宙工学までもが、建築、とりわけその形態と無関係ではなくなった。

バナムが建築をポップ・カルチャーに結びつけたとき、建築の形態に関する普遍的な規律は、近代建築の一部が主張したような単純な幾何学的形態を持っているか否かではなく、その時代に大衆が求めているものを満足させているか否かであった。バナムはアーキグラムなどに特徴的である、空想的な要素や宇宙時代のイメージといった、ポップ・カルチャーからの様々な引用に対して寛大であった。日常生活やマスメディアの中に溢れる図像を借用することで、建築言語の領域の狭さを批判し、建築の新たな見え方を模索、あるいは拡大しようという試みは、1960年代、70年代に多種多様に存在した。そうした試みによって住居の内と外に関わらず自らを取り巻く状況に対して大衆が建築家と同じように強い意識をもち始めたことが示された。そして同時に、

建築家たちは、大衆に、自らが住まい、活動する空間を機能させるより良い方法について考えるよう促すことをも目論んでいた。

近代建築は、外見上の様式よりも高度な問題を取り扱うようになり、その結果、それまでの建築と全く異なるものになった。真に新しいと言える技術に支えられたバナム流の機能主義に適うと同時に、そうした技術と感覚的に結びつく造形芸術としての建築があるとすれば、どの時代においてであれ、彼はそれを称賛したであろう。

環境技術とポップ・カルチャーは建築の境界を物理的にも心理的にも曖昧なものに変えた。バナムは建築を「人間のおかれた状況そのもの」だと述べる。しかしながら、建築家は、人間の環境を調整するために何らかの方法で人や物を囲うことを中心に考えて行動するという点では、変わっていない。その方法となる構造力学や新素材の材料に関する選択範囲は様々な新しいテクノロジーの発展によって広げられたが、生み出される環境は人間が生きるのに十分に機能的であることが要求される。

現在見られる建築表現は、機能や構造と不可分でありながらも、極めて自由度を増している。テクノロジーはそうした建築の在り方に貢献することもあれば、対立することもある。環境技術と結びつけることで建築に対する機械、あるいはテクノロジーの関与を的確に捉えようとする姿勢、そしてそこから建築の在り方を見直そうとしたバナムの試みを、現代のコテキストで読み直したとき、そこにはテクノロジーへの盲目的崇拜に対する懐疑と建築家の職能に対する信頼が窺われるのである。